

妻と私

——高齡者文学人生論

江藤淳 (1932-99)

『妻と私』 (1999) 「文藝春秋」

『夏目漱石』 (1956) 「東京ライフ社」

『一族再会』 (1973) 「講談社」

『漱石とその時代』 (1970-99) 「新潮社」

だが、この家は何故か死んでいた

江藤淳が風呂場で手首を切って自殺したのは一九九九年七月二十一日。享年六十六。

「心身の不自由は進み、病苦は堪え難し。去る六月十日、脑梗塞の発作に遭いし以来の江藤淳は形骸に過ぎず。自ら処決して形骸を断ずる所以なり。乞う、諸君よ、これを諒とせられよ」というのが遺書である。

ただし、数ヶ月前の文藝春秋五月号に掲載された『妻と私』も遺書として読むことが出来る。妻慶子に先立たれたのは前年十一月七日、こちらを重視すれば、後追い自殺ということになる。

「五月二十二日の、午後六時半頃であった。平成十年のことである。大学から戻って、角の旧里見弴邸の前でタクシーを降りた私は、左の谷戸に通じる径を二、三歩行きかけて、眼の前に現われたわが家のたたずまいに、いつもとは違う異様なものを感じないわけにはいかなかった。

家にはまず、電燈が一つもついていなかった。家内がたまたまこの時間に不在であったところでそのこと自体にはどうということもない。ただその場合には、門燈がついているとか、玄関に明かりがともっているというような、家が活きていることを示す証しがかならず認められるはずだ。だが、この家は何故か死んでいた」。

家のたたずまいからその死を感じとる作者の感受性は異常に鋭い。この日は妻慶子の死の五ヶ月



妻と私

—— 高齢者文学人生論

半前、本人の死の一年二か月前だが、前兆はあった。妻が末期癌で、せいぜい半年の余生しかないということには夫にはわかっていた。ただし、告知していないので、妻はそのことを知らない。

家の玄関の鍵を開けて、書斎にはいり、鞆を置いた瞬間に、机の上の電話が鳴った。

「江藤さんだね、ご主人さんかね・・・」

「はい、そうですか」

「・・・実はお宅の奥さんが事故を起こしたんだよね」

妻は二種免許を取ってタクシーの運転手でもやろうかしらと冗談をいうほどの腕前だった。体調がふつうなら事故を起こすはずがなかったが、おそらく呼吸困難だけではなく、機能麻痺が右足に及びはじめているにちがいない。そのための数秒の身体的な反応の遅れが、軽トラックの側面に衝突する事故につながったらしい。

それから妻が入院し、夫は介護に専念する。残された生と死の時間をできるだけ確保し、そこがかつてない深い交流を行った。「どうか患者にはできるだけ苦しみの少ないように臨終を迎えさせて下さい」と夫は医師に頼んだ。

妻との死の時間が濃密すぎたのか、告別式の後で、夫は入院した。犬は飼っていたが、子供はいなかった。俳句や短歌の趣味はない。

作家は行動する

江藤淳